模範愛育班の指定

愛育班を普及し、その活動を充実させるため、次の条件により模範的な愛育班を「模範愛育班」と指定し、見学実習の場とします。

指定は毎年4月1日より翌年3月31日までの1年間です。

1．愛育班組織が確立し、その活動が他の模範となるものであること。

2．愛育班活動の見学実習地として、本会が行う研修会の研修生又は他市町村の愛育班関係者を受け入れることができること。

平成28年度は下記の愛育班を指定します。

埼玉県上尾市母子愛育会

山梨県南アルプス市愛育連合会

「愛育班員の手記」入選者一覧

優秀作

県　名	氏　名	所　　属	タイトル
埼玉県	加藤（かとう）　美津枝（みつえ）	加須市母子愛育連合会 騎西支部	双葉町と一緒に歩む新しい愛育会

佳　作

県　名	氏　名	所　　属	タイトル
岡山県	光岡（みつおか）　信子（のぶこ）	岡山市愛育委員協議会	キルトづくりを通しての愛育活動
長崎県	太田（おおた）　ミドリ	川棚町中部地区母子愛育班	母子愛育班活動を振り返り、今思うこと
大分県	西村（にしむら）　なぎさ	国東市武蔵町愛育会	愛育のスパイラル

優秀作

双葉町と一緒に歩む新しい愛育会

埼玉県加須市母子愛育連合会騎西支部　加藤　美津枝

「騎西に愛育会というヘルス・ボランティアのグループがあるのですけど、入会していただけますか」私と同年配くらいの女性に声をかけました。3年前の夏であったと記憶しています。その女性は東日本大震災で福島県の双葉町から加須市騎西に避難している人でした。「福島ではそういう組織は聞いたことないですけど、どんなことをするのですか」「8月に子どもたちを集めて七夕まつりをやるので、まず近所の子どもさんを誘って来ていただけますか」とお誘いしました。

加須市は一つの市と三つの町が平成22年に合併し、新加須市が誕生しました。愛育会も加須市母子愛育連合会という名称で合併しましたが、我が旧騎西には愛育会の組織は存在しませんでした。旧騎西町を除いて、大きな組織となった加須市母子愛育連合会は着々といろいろな事業を実施していきました。

そういう中で、保健センターの保健師が、騎西地域にも愛育会を作ろうということで、いろいろな団体に呼びかけをしたのがスタートでした。

設立に向けて準備会が、月一回のペースではじまり、そのとき関わった会員数は9人でした。規約を作ったり、役員をきめたり、周りの様子を調査したり、愛育会の歴史を勉強したりして、１年後に設立総会を開くことができました。

名称は加須市母子愛育連合会騎西支部、会員数9人、予算14,000円からのスタートでした。市長から「会員数の多い少ないではなく、地域に愛育会ができたのは、大変喜ばしいことである」というお言葉を頂戴し大変感銘したのが昨日のように思い出されます。

そして、七夕まつりの当日その双葉町の方は、お孫さん、近所の子どもたち、お手伝いに娘さんまで連れてきてくれ、七夕飾りを作り、歌を歌ったり9人の会員とともに一緒に手伝ってくださいました。本当は自分自身の事で精一杯で、ボランティアどころではないのに参加していただき、感謝の気持ちでいっぱいでした。もう、ずっと騎西に住んでいるような雰囲気でした。「騎西と双葉町の架け橋に少しでもなれれば」という思いで、入会を承諾していただき10人目の会員となってくださいました。

その後の騎西支部の活動は、地元の小学校に双葉町の子どもたちも大勢通っているため、体育祭には子どもたちは、いままでの「騎西音頭」に加え「双葉音頭」を全員で踊ります。愛育会では児童の指導に二つの民謡を指導にいく事になり、夜、みんなで民謡の練習をし、体育祭では、児童と双葉町の人たちと一緒に踊ることもできました。

第45回愛育班員全国大会で、加須市母子愛育連合会の会長が、秋篠宮妃殿下から「加須市では双葉町の方がお世話になっております」と、お声がけいただいたという報告を聞いて、本当にお気にかけていただいているのだと思いました。

「愛育会の事業はすばらしいですよ」という言葉をバネに新生愛育会は、これからはもっともっと活動の輪を広げていきたいと思います。

佳作

キルトづくりを通しての愛育活動

岡山県岡山市愛育委員協議会　光岡　信子

当協議会は、昭和40年に発足し、平成27年に50周年を迎えました。この節目となる年に、協議会として何か取り組める活動はないかと考え、がん検診の推進のなかでも乳がんに焦点をしぼることにしました。

これまでも、乳がん検診を推進するために、各地域や地区では声かけをしたり、若い世代も参加している地区や町内会の運動会でPRの行進をするなど、様々な取り組みを進めていました。

市全体としてできることは何かを協議会役員として話し合い、愛育委員自身がいま一度乳がんについて考え、どんな取り組みをすれば、より多くの市民の方に乳がん検診を受けてもらえるのか考えていこうということになりました。その方法として、これまで取り組んだことのあるキルト作製とし、ピンクリボンを中央にデザインすることにしました。

愛育活動とキルトづくりにどんな関係が？と疑問に思われる方がいるかと思いますが、きっかけは平成11年度に作製したエイズキルトでした。愛育活動の一つに性教育を掲げており、そのなかでエイズについても学ぶ機会がありました。しかし、自分たちの生活には程遠く、他人事のような感じもしていました。そんな時、エイズを理解するための活動のひとつとしてキルトづくりがあると知り、取り組んでみることにしました。

一針一針布を縫い合わせていくなかで、参加している愛育委員同士が自然とエイズについて話をするようになりました。何度か集まり話しているうちに、エイズを身近なこととして捉え、理解を深めていこうという機運が高まっていることを感じました。また、話をしてい

るうちに人と語り合う楽しさも感じ、キルト作品が少しずつできあがっていく喜びを感じながら愛育委員同士のつながりを深めることにもなりました。

班会のなかでも、テーマを決めて話し合う機会はつくっていますが、堅苦しくなったり、話をする人が偏ったりと、話し合いをする良さまでだせていなかったように思います。しかし、キルトを作る時の布の手触りやぬくもりを感じながら話すことで気負わないためか、みんながざっくばらんに話をすることができ、そのなかで解決策をみつけたり、新たな活動につなげたりすることができました。

その後エイズに限らず、健康づくり計画である「健康市民おかやま21」の推進キルトを作製したり、東日本大震災の際には、被災地に向けキルトを作製し贈るという取り組みもしました。いずれの作製時も、多くの人が関わり、健康づくりについて語ったり、防災について考えたりしました。

乳がん検診を推進するために作製したキルトも、多くの愛育委員が関わり約5か月かけて完成させました。キルトが完成した時は、作製に関わった皆さんが達成感や満足感を味わったことは言うまでもありません。何度も集まって作製するなかで、この間、どんな取り組みを地域でしているか情報交換し、自地区の活動に取り入れたり、検診を受けることが難しい理由は何だろうと話をしたりしました。また、時には愛育活動以外の楽しいおしゃべりもしながら進めたことで、仲間意識も強まり、愛育活動の楽しさも味わうことができました。

現在は、完成した乳がん検診推進キルトを用いて普及啓発しています。乳がん検診に関心がない人でも、キルトを見て話が始まることもあり、自然に検診をPRすることができています。

愛育活動の基盤である話し合いを大切に皆で繰り返し、生活に根ざした問題を解決していく手段のひとつとして、今後も愛育活動にキルトづくりを取り入れていきたいと思っています。

佳作

母子愛育班活動を振り返り、今思うこと

長崎県川棚町中部地区母子愛育班　太田　ミドリ

今を去る28年前、お誘いを受け愛育班活動へ参加しました。当時、「愛育班」という言葉にはなじみがなく、当然、内容も知りませんでした。連合会や地区研修会に出席しているうちに活動への理解も深まり、保健師さんや先輩方の指導・助言をいただきながら、活動へ溶け込んでいきました。

当時は「虐待」や「育児放棄」などの言葉は現在のようには聞かれませんでした。地区公民館に親子で集まる機会を作ってみたところ、参加者も多かったので、次からは「仲良く遊ぼう会」として発足し、こいのぼりや親子ゲーム、おやつの試食会などを行い、楽しく交流しておりましたが、転勤者が多い地区であり、また少子化も伴い、徐々に参加者が少なくなったため、開催することができなくなりました。

しかし、地区でこれだけは続けようと班員一同で頑張っていることがあります。５月のこどもの日を前に、ちまきを手作りし、未就学児の全世帯へ「〇〇ちゃんが健やかに成長されますように、心を込めて作りました。お子さまと一緒に召し上がってください」とメッセージを添え、班員で手分けして配っております。

毎月の訪問は、留守も多く難しい時代になりましたので、その時は夕方～夜にかけて訪問し、家族とお会いし、言葉を交わして近況などを聞くように努めております。

そのような長年の活動の中で、「班員で本当によかったな」と思った事例を振り返ってみます。

「仲良く遊ぼう会」に３歳の女の子と４か月児を連れて参加されたお母さんがいました。女

の子に手がかかり、とても大変そうだったので班員が赤ちゃんを抱っこしましたが、女の子はじっとしていません。お母さんは恐ろしい顔になりました。家での様子を伺うと、「いつもこうで、私は食事もゆっくり食べれない。つい手が出てしまい、怒ってばかりです」とのこと。声かけメモに記入し、保健師さんへ繋いだところ、すぐに訪問していただき、しばらく実家で過ごし、落ち着かれたそうです。

次に、３か月健診のお誘いで声かけ訪問した時、お母さんがとても疲れた様子で出て見えました。若いお母さんだったので、「ごめん、寝てた？」と聞くと、「うん」と不機嫌そうでした。気になったので、お母さんと顔なじみの班員さんに、後日訪問してもらいました。その班員さんには、いろいろ話をされ、一日預かりを頼まれるなどされたそうです。５月にはこいのぼりが掲げてあったので、とても嬉しい気持ちになりました。

また、知り合いのおばあちゃんから、お嫁さんが体調を崩されたようで、「子どもの泣き声に反応しない。ミルクを飲ませるのも面倒くさいと言って、表情もおかしいので、心配で仕事にも出れない。ボランティアをされているので、どこに相談をしたらよいか知りませんか」と相談を受けました。家の近くの子育て支援センターを紹介したところ、すぐに行かれ、おばあちゃんと同年代のスタッフが、体験談を交えて話をされ、とても心が落ち着いたそうです。その後、保健師さんにも相談し、保育園に入園し母子ともに元気に過ごされているようです。後日、おばあちゃんに様子を訪ねると、「孫がお母さんを育てているようです」と、すっかり落ち着かれていました。

それぞれがいい結果となり、このような手助けができたのも、長年、班員として活動する中、数々の経験と知識の積み重ねがあって対応できたことだと思っております。これまで、多くの方々との出会い、触れ合いがあり、私も一緒に成長させていただきました。

これからも、乳幼児への見守りはもちろん、高齢者の方々へは、健康長寿が続かれますよう声かけ、見守りを続け、明るく健康な町づくりを目指し、今後も意欲ある活動を続けてまいります。そして、人と人との繋がりを大切に、愛育の輪を広げ、温かみのある母子愛育班員であり続けたいと思います。

佳作

愛育のスパイラル

大分県国東市武蔵町愛育会　西村　なぎさ

主人の実家で、義父が一人暮らしをしていた国東市武蔵町に移転し、義父の介護を経て、愛育班員を務めさせていただくようになった私は、「愛育のスパイラル」と出会いました。

武蔵町愛育会では毎月『愛育会だより』を発行しており、先月、嬉しくも200号を達成しました。まだ新米の私ですが、先輩方に大変温かく励ましていただきながら、今年は分班長を務めさせていただいています。そのお陰で『愛育会だより』の編集に携わる機会が与えられ、班員さん達の手記の紹介、旬の食材を使った健康レシピ、健康診断･予防接種のご案内等、保健師さん情報やベテラン班員さん達の智恵が詰まったおたよりが、限られた時間内で形となっていく様子を拝見し、とても感動を受けました。

そんな先輩達の愛育の心とおたよりを預かり、首から愛育班員証をさげ、いざ出動！地区のご家庭を毎月ピンポンして廻ります。が、実は、それが私にとってはドッキドキな瞬間なのです。一人暮らしの高齢者のお宅のドアベルを鳴らし、耳を澄まします。ですが、しばらく待っても何の音もしません。「よし、もう一度」とまたベルを鳴らします。また何の気配もしません。「どうしよう」と悩んでいると､「は～い」と奥から声がして､杖をついた女性がゆっくりと戸を開き、「いつも有難う」と満面の笑顔で出迎えてくれます。正直、新米の私にとって、声かけ訪問は勇気がいります。でも、そんな笑顔を見て無事が確認できたとき、「勇気を出して良かった」と実感します。また、リハビリが大変だ、というツブヤキや、手をかけて育てた元気なお野菜、庭先を彩る花々を目にすると、どうでしょう。そこには人生の大先輩達の心が感じられます。そして､心が洗われます。声かけを通して支えていただいているのは、

実は、声をかけて廻っている自分の方だということに、恥ずかしながら気づいてしまいました。全く無縁だったこの地に移住して来てからというもの、分からないことだらけで戸惑うこともありました。でも、毎月そういう体験をする度に、地域の中で役割を与えられるということに、どういう意義があるのか、なんとなく見えてきたように思います。かくして私は、託された愛育のおたよりをお届けすることを通じて、先輩愛育班員の方達や地区の皆さんから元気をいただき、「愛育のスパイラル」の中をぐるぐると廻っているのだなということに気づきました。

最近注目の「健康寿命」ですが、武蔵町愛育会は、国東市が推進する「健康チャレンジ」という事業に参加し、地域の方達の健康づくりを応援しています。毎朝ラジオ体操をする、減塩をする等、無理のない運動や食生活の目標を決め記録する、といった取り組みです。皆さんに勧める立場の自分も、なるべく歩いてみたり、お味噌汁の塩分を計ってみたりしています。義父の介護を思い出し、皆さんの健康寿命を、のつもりが、自分自身の健康のためになっています。これもまた、役が与えてくれた「愛育のスパイラル」です。

昭和天皇のご沙汰書によった愛育会発足の趣旨は、母子の保健・福祉だったようですが、少子高齢化が激化する現在では各地の愛育会活動は高齢者対象のものが多く、必然的に愛育の形も時代の変化やニーズに適応してきているという大きな流れを、県の推進大会や九州ブロック研修会に参加してみて分かりました。各地域に根付いた活動は不可欠である一方、地域を超えた集会に参加することで、同じ愛育の心で日々活動に励んでいる各地の愛育会の発表を聞き、多種多様な取り組みや熱意、持続力に感銘し大変勉強になり、また新たな気持ちで自分の活動を見つめ直すきっかけとなる貴重なチャンスを与えていただけたことに感謝しています。

愛育活動とは、支えるつもりが支えられる「愛育のスパイラル」であり、今後もそのスパイラルの中を楽しく進んでいきたいと思います。